病院図書館　2014;34(1):26-36

特集1　機関リポジトリ ― 病院図書館でもできるのか？ ―

パネルディスカッション：病院図書室における機関リポジトリの可能性

〈パネリスト〉
関西福祉大学附属図書館　西本　朱美 氏
奈良県立医科大学附属図書館　和田　崇 氏
アグレックス　福田　典雅 氏
〈座長〉
大阪大学附属図書館　前田　信治 氏
〈司会〉
洛和会音羽病院　図書室　藤原　純子

前田：もともとは普通のパネリストとして出てくれということだったのですが、もう私は普通のパネリストはできません。座長しかようしませんので、藤原さんに頼み込んで座長をやらせてもらいます。パネリストの方々からいろいろコメントを引き出したいと思いますが、これは座長がする仕事ではなく、本来参加者の皆さんがパネリストから答えを引っ張り出さなければならんのですよ。

最初にちょっと先ほどのお話の中で、気づいた客観的なことについて。Google で DRF（ダーフ）と入れると、日本の最大の機関リポジトリの団体が出てくると思います。ここには各大学が加盟しています。どんなふうにコンテンツが登録されているのか、いろんな大学の機関リポジトリを見ればいいというふうにいいましたけれど、DRF を見たら NII の機関リポジトリ一覧と並んで、かなりたくさんの実例が出ていて、メタデータがどんなふうに登録されているかとか、具体的にわかると思います。その中で新潟大学の機関リポジトリなんですが、XooNIps ではなく DSpace で作られています。埼玉大学が XooNIps を使っていますが、パネリストがおっしゃっていたように、慶應義塾大学が主になって国内に広めています。理研が作ったものですけれどね。それから北海道大学はリポジトリの URL の中に Eprintsってできているんですけれど、これは機関リポジトリのサーバーソフトウェアとして Eprints を使っているわけではありません。DSpace です。ただ、サーバーの名前として Eprints というサーバー名をつけているんですね。だから、Eprints というのが出てくるんです。だいぶカスタマイズが進んでいますけれど、DSpace の顔をしています。そういうふうなことがちょっとお話の中で気になったのです。まあたいしたことではありません。

それぞれの大学がそれぞれの時期に機関リポジトリを構築していますので、最初のころは DSpace しかなかったんですね。それしか選択肢がなくて、みんなややこしいカスタマイズをカタカタやっていて、それこそシステムに詳しい人でなければ機関リポジトリを構築できなかったし、アグレックスのような業者さんもなく、当時は代わりに作ってあげるという人がなかったのです。それで、当時は構築のマニュアルが DSpace しかなかったんで、みんな DSpace を使っていたわけなんです。その後いろんなソフトウェア、あるいは商用も出てきたし、フリーのやつも日本に紹介されてきた。ちなみに北海道大学で行木（なめき）先生という数学の先生がいらっしゃって、その人の研究室が立てている機関リポジトリがあるんですけれど、そこが Eprints を使っているのです。一応そのことも例としてひとついっておきます。

さて、私が単なる客であれば相当いろんなこと

を今日の発表者の方々に聞きたいと思うんですが、それをちょっとやっているとよくありませんので、つっこむのもよろしい、純粋に質問するのもよろしい、みなさんから今日の発表者の方々に聞いてみたいことはございませんか？いっぱいあるはずですよ。

フロア：アグレックスさんの発表のところで質問ですが、著作権処理のところで著者に共著者がいる場合、通常は筆頭著者へ依頼するということですが、それはどういう形で依頼されているのかということと、筆頭著者に掲載OKですよといわれた時に、それは共著者にもOKをもらったという認識でよいのか、それから後の作業というものもお聞きしたいと思います。私も赤十字でリポジトリに参加しており、少し問題が出てきているので、お尋ねしたいと思いました。

前田：アグレックスが提供している著作権処理の仕方について、福田さんご回答ください。

福田：私どもの場合はあとで問題がないという前提で、当然筆頭著者の方には許諾をもらって、あとの共著になられている方にも必ず書面で許諾をいただきます。あとで問題が起きた時に書面が証拠になるためです。

フロア：書面というのは手紙ですか？メールですか？

福田：手紙でもメールでも、通常は手紙などで行います。

フロア：手紙で返ってくるのでしょうか？

福田：返ってこなければグレーと判断します。私たちは大学さまと主に行っていますので、どういうふうな形でやりましょうかというのは提案はしますけれど、ただ、基本的な考え方というのはあとで問題が起こらない、そのためにどこまで許諾を取って、結果何を残すかというところを明確にしておき、対応するということです。

前田：その著作権許諾の業務を会社として請け負って遂行する上であれば、今のアグレックスさんの姿勢は、必ず全員の共著者に許諾を取るのは当然だと思います。業務として会社がやる時には最悪後で訴えられた時にも、ちゃんと自分は意思表示をはっきり持っているんだという証拠を持たなければ危なっかしくて仕事できないですね。だからそれはお話を伺っていて至極当然だと思いました。で、業務として請け負ってする時には妥当だと私は心から思いますけれど、じゃあ、外注をしなければどうなのか？これにはかなり温度差があります。論文、医学系の論文だってかなり共著者が多いのが普通じゃないですか、単著ってあんまりないですよね。よほどの自信家でない限り。

たとえば大阪大学で私がリポジトリ担当の時に、何をしていたかというとそれを単に例で報告するとしたら「あ、先生なんか新しい論文書きはったみたいですね、Web of Scienceで見つけました。あの、リポジトリ載していいですかね？共著者ですか？共著者に許諾を取らんといかんかですか？そんなんは先生判断してください」。共著者が5人おられて先生が筆頭で、残りの共著者と筆頭著者の関係がどういう関係かなんて私が知る由もない。先生がOK、筆頭著者である先生がOKというのであれば残りの4人は反対なんかするはずがないという関係であれば先生の一言だけでよしとこっちは思います。で、そうじゃなくて「それはできない。ことに一番後ろに名を連ねてもらっている先生は一番最後の著者だけれど私の指導教員にあたる人であって、そういう人に無許可で話を進めるわけにはいかん」と筆頭著者が思うんであれば、先生からその許諾を取ってくださいといいます。で、許諾が取れないということであったら、先生もやっぱり公にはできないということだからそういう時は残念だけれど載せることはできないというふうな対応をやっていました。当然そこで何か問題が起こったら私のところに文句が来るということで、それを引き受ける覚悟のもとでやっていました。ただ、現実には一つも来ませんでした。

フロア：大学などでは、外注ではなく自分のところで、その場合は口頭で。その代わり自分が

責任を持つということでしょうか。

前田：一応その電話の後で、先生から公開してもいいというメールを一本もらうというのはやっていました。でも電子メールというのはおそらく民事訴訟の法廷ではかなりあやしい。だって後でいくらでも改ざんできます。その点、先ほどの手紙や書面というのは、まして自筆であったり、本文は打たれていても署名の部分が自筆であったりすれば、法的に証拠能力があります。完全に問題ないようにするとすればそうでしょう。ただ、その研究者の論文成果公開、というのは基本的にみんな公開したいと思っているのが普通です。だから現実に私の担当していた3年間では文句は来なかったのでしょう。そこは自分で責任を取らないとしょうがないですね。

和田：先ほどの筆頭著者の方に責任を持って許諾をとってもらうということですけれど、うちも似たような感じでやっております。うちの場合は筆頭著者の方が論文の主たる著者になるんですけれど、最後のラストオーサー、and*** と書いてあるような場合、ラストオーサーが取りまとめをされています。前にうちの大学であった事例としては「先生これを載せてください」と筆頭著者に依頼をすると、先生から「共著者はどうする？」と聞かれました。ラストオーサーというのは一番偉い先生なんで、その先生の許可さえあればOKじゃないかということで、筆頭著者の先生にアタリをつけてもらいました。で、ラストオーサーの先生のところに行って許諾をもらって、先生これ包括契約ということになりますが結構ですかね？といって、包括許諾書を提出していただきました。

フロア：包括許諾書というのはリポジトリで見ることができるのでしょうか？

和田：GINMUで公開しています。共著者用の許諾書のひとつに包括許諾書というのがあって、自分が書いたすべての論文はOKですよというのと、たとえばうちで発行している一般教育紀要に書いた私の共著の論文を載せていいですよというファイルがあります。また参考にしてください。

前田：この論文を公開リポジトリに載せてもいいですかという許諾だけだと、その先生が次の論文を書いた時にまた許諾を取らなければなりません。今後先生が書かれたものについて勝手にこちらで見つけたら載せてもいいですかというのは一つの包括ですよね、法的におかしくありません。JASRACなど音楽関係の許諾ってみなそうですよね。いちいちしてないですよね。作曲者や歌い手さんとJASRACの間でそういう包括的に著作権とか、演奏権なりの処理をしているわけですから、それはおかしくないです。今後全部じゃないけれど、今後この雑誌に載せたものはいいよというのも包括のうちです。

フロア：基本的なところなんですが、当院は三つの病院で一つの紀要を作っています。その場合、どのように考えればいいのでしょうか？それぞれの図書館員はみんな違う会社に所属しております。

前田：どのように考えるというのは何をするためにでしょうか？

フロア：機関リポジトリを考えていくうえで、私が勤務しているところだけで考えて進めていくものなのか、ほかの病院の図書館員とも話し合って進めていかなければならないのか、です。

前田：自分の組織は組織であるけれども、発行している刊行物は自分の組織だけで刊行しているわけではない。自分の組織単独で生みだされるものもあるけれど、たとえば主要な発表手段である紀要なり雑誌というものを例にとると自分の組織だけではなく複数で連合をして刊行している。そういうところで機関リポジトリの活動をするためにはどうしたらいいのか？何か普通と違うのか？ですね？

西本：その紀要を発行する際に、取りまとめているような紀要の編集委員会とかがあるのであれば、その編集委員会でたとえば投稿規程がどうなっているかとか、インターネット上にそれを載せてよいかなどの確認を行うのが一番いい

かなと思うんです。そこがクリアできればそこの編集委員会の長の方が、その三つの病院の代表者などにこういうリポジトリを通して研究成果を公開したいという話をされていけばいいのではないかと考えます。

和田：私も同じような答えなんですけれど、取りまとめ的には編集委員会というのはあるんですかね？

フロア：はい、あります。

和田：じゃあそちらの方とまずは話すことになると思います。今回こういう研修会に参加されてこういう場を体験されているわけですから、ご自身がきっかけとなってそういった話を持っていって、編集委員会と話し合っていくというのがいいのではないでしょうか。

前田：まず、機関リポジトリというのは基本的に自分の組織が単位です。自分の組織が生み出す学術情報成果というのは複数の機関がまとめて刊行している雑誌だけではないはずです。自分の機関の学術成果公開の活動を促進するために行う自分の機関の機関リポジトリの活動はどこまでも自分の機関単独のものです。だけど、それとは別に複数の機関で刊行している刊行物を機関リポジトリに載せるという話であれば、当然その複数の機関の関係者に話をして共同で進めなければならんでしょう。具体的には和田さんがおっしゃったように、著作権は誰が持っているか？を編集委員会に確認すればいいわけです。たとえば神戸市立市民以外の組織にまだ機関リポジトリの担当者がいない場合、担当者は誰なんだと一生懸命に探して見つけてからでないと進まない話ではありません。その雑誌に限っていえば、雑誌の編集委員会というところにあなたが主旨を説明し、そこの了承を得て進めばよいはずのことです。ちょっと切り分けて考えるといいですね、自分の組織とそれ以外とを。はい、えっと他にないですか？

フロア：今のお話と似ているのですが、病院が連携している個々の病院や診療所の先生とかの論文をここで集めて扱うことはできるんでしょうか？

和田：Y病院の場合は何か取りまとめているものがあるんで？

フロア：何もないです。

和田：うちの場合は県立というくくりはあるんですけれど、今後は奈良県下のものを集めていきたいと思っています。けれど、うちもまだどこも話は設けていない状況なんです。今後Y病院さんの方でやっていきたいということがあれば、それは病院さんのほうに掛け合って話をつけていけばいいと思うんですけれど、Y病院さんは今どのような状況ですか？

フロア：何もないです。

和田：そうですか、その各病院の先生方の論文も集めたいということでしょうか？

フロア：それが集められるのかどうかを知りたいのです。

和田：それはやはりそのリポジトリの形態によるかと思います。今後病図協さんでリポジトリをするんであれば、病図協所属の方であればOKだと思うんですけれど。解釈的にどうでしょう？前田さん

前田：わかりやすくちょっと別の例にして考えてみましょう。大阪大学で機関リポジトリを開設しているところに、私の個人的な友達の先生が神戸の何とか大学にいると、神戸の何とか大学にはまだ機関リポジトリがない。その時に「前田さん、私、機関リポジトリにコンテンツ載せたいですけれど、うちにはなくて。作れっていってもうちの図書館が動いてないんですよ。だから大阪大学の機関リポジトリに私の論文を載せて、月に何件ダウンロードがあったか教えてよ」という依頼があったとします。その例と何か違いますか？

フロア：地域連携室経由で提携していたら、うちの一員かなと思ったわけです。

前田：今私が挙げた例だと、大阪大学の機関リポジトリに投稿してもよいかどうかが、当然規定としてあるわけなんです。で、和田さんがいったように、その中に大阪大学の構成員であること

というのはやはり大きくうたわれているわけですね。大阪大学の機関リポジトリを運営している図書館員と仲のよい大学の職員、教員は投稿してよいという規定は入っていないし、入れようとしてもたぶん無理でしょう。なぜなら合理性がないからです。そうではなくて地域の共同リポジトリですっていうふうにこれは共同、地域の成果の発信の場としてそれを使うんですという定義の機関リポジトリであれば、それは仲がよいかどうかは別として一定の条件に沿っていればそれは載せてもよい。

たとえば病図協さんで病図協の加盟機関の共同リポジトリを設置する。その中の一員としてY病院さんのところもある。Y病院さんと連携している組織に所属している先生のコンテンツを、病図協さんの機関リポジトリに載せていいかどうかは、病図協さんの機関リポジトリが設置され、動き始める前後に決められる規定によります。病図協加盟機関の研究者だけではなく、病図協の幹事会で認めた者、みたいなそういうものを入れるか、入れて通るかどうかは別ですが、そこで決めるのです。ちなみにオープンアクセスを推進するという意味では、別に自分のところの組織の構成員であろうがなかろうが、まあ、まじめに書いた論文であればいい、ちゃんと本気で論文を書いたんであればどこの組織がやったって構わないんですよ。でもだれでも無制限に載せていいというものじゃありません。そこは自分のところのリポジトリの規定で含まれるような何かを考えるといいと思います。

和田：うちもまずは県立の方から集めていくということで今後奈良県下の論文を集める予定です。

前田：採択されれば名前は売れるし、そもそもこれ以上名前を売る必要はない、でも若手でこれから名を売っていき、自分の研究内容を人に知らせ、ちょうど大学の教員のステータスでいうと助手、助教さんね、パーマネントの准教授になる前の人たちとかは何とか載せたい。一流雑誌に載せてすんなり採択されればいいのですが、そこまでちゃんとした英語を書くのは大変じゃないですか。教授からなんやかんや世話せえと言われて、睡眠時間3時間というような人も結構いるし、本当はそういう人たちに自分の成果公開の場というものを提供することに一番大きな意義があるんですけれどね。そこはまあ、あの、無秩序にならないように、あんまり好きにやっていると、「お前この活動の趣旨って何なの？」と上から言われると思います。そこらはよう考えてください。

ほかに？

フロア：まだ仕組みをあんまりわかっていなくて、初歩的な質問ですが共同リポジトリに参加すると、ほかの共同リポジトリには参加できないということでしょうか？今までお話しくださったリポジトリという概念が身についていないとしたら、自分の病院のホームページをあっちにもこっちにもリンクされているという感覚があります。たとえばGoogleで検索すれば一つの論文が検索結果として出てくるのであれば、どこのリポジトリに入っていても別に関係ないのではないかということと、共同リポジトリに参加するいいところ、悪いところがよくわかりません。

前田：二つの疑問がいっしょくたになっていますね。西本さん、コメントしてください。

西本：まず二つのリポジトリに参加できないかということは、たとえば奈良県立医大さんのように兵庫県の病院関連の共同リポジトリができました、病図協さんの共同リポジトリができました、どっちもに入ってもいいかということですよね？

どっちもに入ってしまうと、登録が2回になります。それをする意味がないんじゃないかと思います。どちらにしてもGoogleなどで検索結果としてヒットするので、二つのリポジトリに参加するのがだめ、悪いというよりも、自分の業務が増えてしまうということがあると思います。もう一つの質問は何でしたっけ？

フロア：共同リポジトリに参加するいいところ

悪いところについてです。

西本：共同リポジトリっていうのを立ち上げるとサーバーが一つで済むんですね。それをたとえば自分のところの病院で構築しようとすると、自分の病院にサーバーを置かなければなりません。そのため、初期費用や維持継続するための費用がかかってきます。でもそれを共同リポジトリにすると、どこか一カ所にサーバーがあればいい、維持経費などもみんなで分担すればいいということになるので、そこが共同リポジトリのメリットかなと思います。ということで答えになっていますか？

前田：そのとおりで、共同リポジトリに参加しなければ、自分の病院単独でサーバーを買って、リポジトリサーバーソフトを入れて、そこにコンテンツを入れて、データをアップして、さらに壊れたらまた自分のところで単独で機械を触って直して、やっていくということがあるけれど、共同リポジトリの場合は、自分ところがサーバーを構築し維持する担当になればやらないといけませんが、そうでない場合は別に何もしなくてよい。機械が壊れたからといって真っ青になる必要はないです。みんなでやっていくのですから。で、それが共同リポジトリと単独で自分の施設で参加するところとの違い。逆にいうと共同リポジトリで決まったこと、たとえばこんなふうなトップページに使用、などのレイアウトが自分の希望するものと違った場合に、それに従わなければならないという不自由さは出てきます。ホームページだったら、複数からリンクしたとしても自分のところのホームページは1個だけですよね。でも、機関リポジトリに複数登録すると、自分ところでもやって、この共同リポジトリでも、あの共同リポジトリでもってやったら、それぞれの共同リポジトリはすべて同じシステムを使いますから、それらが同じサーバーソフトを使っていても、すべてにコンテンツの登録をして、取り下げの時には取り落とすのも全部やらなきゃいけない。また、URLは違うから、別のサーバーですから、Googleには結果が二つ出てくるでしょう。JAIRO上でも、メタデータが集められるJAIRO Cloudでも同じコンテンツが二つ出てくるでしょう。で、二つ出てくるけれど中身は同じ、そういうことが起こるので、複数のリポジトリへの登録は、禁止する人はいませんがあまりメリットはないですね。

フロア：共同リポジトリの入り口やトップページは今までのインターネットのホームページのように利用者（エンドユーザー）はあまり見る機会が少ないということでしょうか？入り口から入って探し出していくというものではなくGoogle検索とかでそれぞれのアップされたPDFを見ていくから、エンドユーザーから見たらどこの共同リポジトリに参加していても別にかまわない、関係ないんだということでしょうか。

和田：エンドユーザーから見ればどこの共同リポジトリに入っていても大して違いはないですね。でも、まあ先ほど言っていたように複数のリポジトリに入るということに意味はないことはご理解いただけたかと思います。ご質問の意図は病院図書館としてではなく、エンドユーザーの立場でご質問ということでよろしいでしょうか？

フロア：そうですね。たとえば自分の病院図書館がリポジトリに挙げているデータを見たいと思った人が探しやすい状態っていうのは、どういうものなのかなと思ったんです。

和田：前田さんの最初の方の説明にあったのですけれど、普通のホームページに載せるのと、リポジトリで載せることの違いっていうところで明白なお話をしていただけたかと思います。まず、データの出方が違う。検索しやすくなるし、一カ所のデータベース（JAIRO）からも検索しやすくなるというのもありますので、ま、ご質問の意図的にはあっているかどうかわかりませんが、リポジトリの方に載せていただく方がいいでしょう。

前田：まとめと補足をいたします。私があなた

の病院の病院長でもなく理事でもなく関係者ではない、単に医学情報を探しているサーチャーである立場として考えると、たぶん私はあなたの機関のリポジトリのトップページにたどり着くことはないでしょう。どこから私が見つけていくのか、たぶん、メタデータが集められていくJAIRO上で見つけるか、Googleで見つけてそちらに行くかのどちらかでしょう。

ところが、それを機関リポジトリの中に入っているデータを自分の研究データとして探す人にとってはそうなんですが、自分の病院の関係者やそういう人にとっては、自分の組織が研究成果の発表の場所として機関リポジトリを持っていることを知っています。うちの病院ってどんだけ成果を公開しているのかなっていうことを網羅的にバッと見たいという時があるはずです。その時はJAIROもGoogleもへったくれもないです。当然そのリポジトリがあるということを知っている人は、リポジトリのトップページまで行って検索するでしょう。それは内部で評価する時などに使われます。「おまえら年間に100万円くらい予算とってなんかリポジトリとかいうのをやってるけど、何ができてるねん」といわれた時に「サイト見てください」と。そういう時にトップページや利用の仕方、アクセス統計などを見せられるだけのインターフェイスを持っておかないといけないでしょう。それでないと事業というものに対する説明が一つもできないでしょう。そういう時に、直接的にリポジトリのトップページの存在意義が一番大きいんじゃないでしょうか。大阪大学の機関リポジトリだって、そこまで見て検索する人ってたぶん学内の誰かぐらいじゃないですか。ほとんどがJAIROやGoogleから来ますしね。それは、それで仕方ないと思って、むしろ自分の機関のリポジトリを単独で検索してもらうよりも、JAIROをたくさん検索してもらうほうが研究者にとってメリットがあると思います。日本中のものが全部検索できるんだから。で、その中で、自分の機関にしかないコンテンツにたどり着いてやって来てくれるんならそれでよし。と私だったら思います。

フロア：いろんな所属先を持つ医師の論文をこの大学の成果としても上げたいということになった場合、結局2個上がってくることになるのでしょうか？

前田：いい質問ですね。それ、大学でもあるんですよ。どうでしょう？大学のお二人。

西本：うちはまだそういう事例はないのですが、以前、前田さんがお話しされていたことを覚えています。オープンアクセスを進めていくうえであれば、先生が二つに載せたいというのであれば二つに載せてあげても結果として同じものが二つ上がっていくだけなので、オープンアクセスということは通っています。二つ載せる意味はないですが、先生の希望であれば載せていいんじゃないというお話をされていたような気がします。

和田：実際の事例ですが、CiNiiにも文献の情報があるし、うちのGINMUにも文献があるということになったら、当然目に触れる機会が増えます。もしもそのように希望があれば目に触れる機会が増える方を選択すればいいと思います。先ほどおっしゃられていたようなオープンアクセスを万人に有用な医学情報を広めていく機会にもなりますんで、それは別にいいとは思います。

前田：目録をとるということに図書館の人は慣れていると思うのですが、どうしても目録をとるというのが頭にあるんですね。まあメタデータの登録というのは、冊子の場合のメタデータをとっているようなものですからね。著者とかタイトルとかで、NACSISやそうでなくても目録のデータベースというのは重複書誌を作ることを非常に厳しく禁止していますよね。ところが機関リポジトリの中のデータというのは、メタデータはそんなにしっかりしていなくてもいいんですよ。一番大きな理由は本文が一緒にあるからです。メタデータがNACSISのように精緻なデータを持っていなければならないのか、それ

はNACSIS-CATを見る人が現物を見るチャンスが最後の最後までないからです。メタデータだけでその資料がどういうものなのかを絶対に間違いなく知らせなければならないから、あれだけ細かいデータがあるんです。機関リポジトリのメタデータはもっとゆるやかでかまいません。メタデータだけ見ても「そんなん私のほしい内容かどうかわからんやん」となれば、全文を見ればいいのですから。最初の何ページかで自分のほしい文献かどうかがすぐわかります。本文が見える全文データベース、あるいは全頁イメージデータベースっていうものは、メタデータをそれほど精緻にとる必要はない。重複を作ることをそれほど恐れる必要はなく、リポジトリが利用者にも施設側にも認められて、登録するのが当たり前くらいに広まった時にはじめて、なぜ同じデータが複数あるのかについて、その無駄さについてのルールを考えればいいです。今はコンテンツを載せるのが進んでいない状況なので、ダウンロードの回数に味をしめて、病院を移るたびに載せてくれといわれて載せてもかまわないと思う。そんな難しい理屈と違うでしょう。合理的だと思ってください。

藤原：病図協で共同リポジトリを実際に開設するとした時にまず、病図協のバックグラウンドについてお話しさせていただきます。病図協は各病院の中の図書館職員が大体一人か二人でやっているところがほとんどで、そういった会員が集まったネットワークです。そして、もし機関リポジトリを実現したい場合、アグレックスさんの資料に、運用パターンがあるのですが、まずこの、1番にある機関内設置というのは、病院のサーバーがなかなか図書館の職員が入り込んでいけるようなところにないということが多くて、機関内設置は難しいというのが現状です。どこかの病院にサーバーを置いて運用するというのがかなり難しい状態のため、するとしたら機関外設置で、共同リポジトリという形になると思います。さらにその場合、どこかの機関が代表してサーバーを設置するというのも難しいだろうということは事前に前田さんにもお話をしています。そして、3番目のJAIRO Cloudを利用するというのも、メーリングリストでは皆さんにお知らせしたのですが、まずこの研修会をする時にNIIさんに機関リポジトリの研修会をするから、来ていただけないですか？とお願いしたのですが、病院へのJAIRO Cloudの提供は今のところしていないため講師としていくのはどうだろうと、あまりよいお返事はいただけませんでした。そのため、現在のところ商用サーバーを使わざるをえないのかなと思っています。その場合にAmazonなどのクラウドサービスを利用するのか、アグレックスを利用するかの選択肢になると思います。そのあたりの詳しいお話をお聞きしたいと思います。

福田：まず、サーバーをどこに置くかというところが問題ですね。サーバーは1カ所に固定して運用しますので、事務局が変わっていくような形でサーバーが移動するというのは、セキュリティ上・運用上ありえないことで、1カ所に固定しなければなりません。固定するにも各病院のところはセキュリティの点から置けないという状況なので、それを外注化してサーバーを自分たちが持たなくても、ほかのところでサーバーを運用してもらってそれを活用するサービス、これをUSPサービスといいます。私どもが提供するのは二つあって、AmazonのAWSを使って対応すること、この場合は私が発表で申し上げましたがサーバーの場所がわからない。たぶんシステム管理者が監視をしに行った時に場所の特定ができないので、セキュリティ上どうなのかといえば若干問題はあるんですけれど、AmazonだからOKみたいなところで、他の企業さんではOKが出ているところが多々あります。ただ、病院関係では一概にOKとはいえません。それがNGならば信用のおけるところに置きます。たとえば私どものところはデータセンターを持っています。24時間365日セキュリティのわかるところで運用していますので、そういうところへサーバーをおいてUSPサービス

を活用するというそういう方法ですね。ただし、値段的には私どものデータセンターを活用するよりも、Amazonのサービスを使ったほうが安いです。

藤原：安いというのは、初期費用とか月額費用で手元の資料にある内容のようなものですか？

福田：そうです。私ども、もともと扱っているのはDSpaceなんですが、NIIさんが出して、私どもはこれを脅威に感じたんです。実際には今まで大学の学内にサーバーを置いて対応していたのですけれど、ASPサーチという形で、自分のところにサーバーを置かなくてそういうサービスを提供できるような形の提案がされましたので、それに追従というか並行してASPサーチという、同じような形の対応をしました。値段設定もNIIは無料です。ただ2，3年後、数年後には100以上の大学を抱えて数人で運用しているので、必ず運用上の破綻をきたす問題が生じてきます。みなさんが質問をした時にすぐに答えられないなどのことがおきるということです。私たちは値段を非常に安くして、DSpaceのSaaS版ということで値段も全然違いますよね。そういう形で始めたのが今回提供するサービスです。

前田：AmazonのAWSの初期費用は10万円ですが、この10万円でAmazonのAWS上にたとえば病図協さんの機関リポジトリのソフトウェアインターフェイスまで出来上がるのでしょうか？

福田：はい、それも込みの価格です。

前田：その下に書いてあるサーバー導入の場合も初期費用10万円で、病図協さんの機関リポジトリのインターフェイスが出来上がるということですね。両方で、AmazonのAWSでもSaaSでもこの初期費用10万円と15万円で、出来上がるソフトウェアというのはDSpaceが想定？

福田：そうです

前田：そこでWEKOという選択肢はありますか？ NetCommons入れてWEKO入れて。

福田：WEKOの場合は、大学さんが申請されて許可が下りたものを私どもは支援をしていますから、そこの許可がなかった場合に難しいかと。

前田：WEKOの利用って申請いらないんじゃないですか？ JAIRO Cloudに参加するのは当然必要ですが、WEKOをサーバーソフトとして使うということの許可ってNIIにしないといけませんか？無料配布なのでたぶん不要と思います。

福田：そういう事例がないので、断言はできませんが、調査して使えるようならWEKOの選択肢も可能です。

藤原：そうすると価格面で変わってきますか？

福田：そこは同じくらいになると思います。

前田：私は両方ともゼロからインストールしたことがありますけれど、たぶん、WEKOのほうがSEがインストールするコストが少ないとは必ずしもいえないので、値段がこれから下がるということは一般の常識的に考えてないということです。この値段だけでもだいぶ安い。

藤原：今日お話を聞かせていただいて思っていたよりも安いと思いました。

福田：私どもも自信をもって特別価格でご提供できると思います。

前田：ちなみにこの後に続く月額2.5万円や3.5万円の中にはデータのバックアップなども入っていますか？

福田：入っています。で、保守込みの値段で、保守にはシステム保守と運用保守があります。大概のシステムベンダーはシステム保守しかしません。サーバー保守というのはまた別にあって、サーバーが動かなくなった場合は別途直していくという保守です。たとえばDSpace上で不具合があった時に対応をするみたいに。後は運用保守。みなさんが運用されている時に、たとえばメタデータを作るのにこの項目ってどうしたらいいですか？一括登録する時にどうしたらいいですか？という時に一つ一つの運用への支援をします。これを含めての値段なので、活用されれば活用されるほどコストパフォーマンスが高いかと思います。

和田：アグレックスさん、うちがお世話になっ

ているのですが、反応が早いです。本当にどんな質問にも答えてくださるので、私もわからないことがあった時に尋ねるとメールで即日対応してくださったりします。NII に連絡して手続きをしたらいいですよと丁寧に対応してくれる。

前田：保守込み一人分の「一人分」とは、アグレックスさんに尋ねる人が一人の場合の値段がこれ、ですか？

福田：いえ、別に一人って限定していないのです。一番困るのが共同リポジトリ 170 施設の病院があがってきた。それぞれの担当者から質問され、同じ内容を複数の病院から問い合わせされる場合などに、事務局などでまとめて質問してくださるということを一人分と認識しています。それが 2，3 人でもいいんですがそういう意味合いです。

前田：価格を見た主観的な印象は？

藤原：私は機関リポジトリには前向きです。当院でも雑誌を発行していますが、すごくグレーな状態で、みなさんから ILL でたくさんご依頼いただくので公開するメリットは感じます。ホームページ上に本を丸ごと 1 冊アップロードしている先生がいて、そういった人のためにも実現したいと一会員として思っています。病図協としても、こういったリポジトリを開設するメリットはすごくあると、今回の研修会やメーリングリストを管理していて実感しています。費用面でも実現可能な価格と考えます。各会員の意見も聞く必要がありますが。

前田：環境を整えるうえで数字も提示され具体的に検討できるステップかなと思いました。

メーリングリストで、山地先生の WEKO の練習サイトで最初に ×× 病院というのを作ってその下に紀要とか細かいのを作って、要するにインデックスを作ってインデックスの下にコンテンツを入れていくという実習をしましたね。あの WEKO 上でインデックスと呼ばれる、あれが、ここのアグレックスさんの資料におけるコミュニティとコレクションです。これは DSpace と WEKO で使っている言葉が違うだけで同じことです。

さらにシステムのことを、たとえば SaaS 版でも Amazon の AWS でもいいんで、それをお願いし、DSpace でサーバーを作ったとして、そのあとでその DSpace でバージョンアップを依頼した時に、いくらかかったという例はありますか？

福田：今は SaaS 版ではまだ、新しいサービスを開始したばっかりで、それでも 17 校あるのですが、バージョンアップした例はないです。今後バージョンアップする場合はデータ移行のところだけ、有料になるかなと考えています。今は 1.62 を使っているんです。将来的には、たとえば 4.0 にバージョンアップをしようと思った時には、個々のシステムの構築はこちらで無料で対応します。ただし、データ 1.62 から 4.0 に移行する費用だけは有料になるかなと思います。まだ決断していません。個人的な見解です。

前田：データが 4,000 件あった場合の価格はどの程度と予想されますか？

福田：たぶん今までの経緯で行くとサーバーを内部においてそのバージョンアップの場合、多々あります。その際のデータ移行は量にもよりますが、25～50 万円の間です。データ 4,000 件と考えると、おそらく 25 万から 30 万円だと思います。

前田：大事な数字をありがとうございました。だいぶ具体的なところにも触れてきましたので、病図協でも検討しやすくなったと思いますが、ほかにはありませんか？

フロア：初歩的なところなんですが、病院だと医師や看護師が論文を投稿した時にどのように吸い上げているか、ダウンロードされた件数などはフィードバックされていますか？

前田：機関リポジトリに載せたコンテンツが世の中の人にどれだけダウンロードされたか？ということからまず。西本さんが発表の中でおっしゃっておられましたよね。

西本：JAIRO Cloud では著者ごとのアクセス数はわからないけれど、論文ごとにアクセス数は

わかります。何件ありました、ということをメールでお知らせしています。

和田：うちは、やってないですね。著者に対して特に結果をあげていません。ニュースレターを出しているので、新しく登録したものはそこで紹介しています。毎月配信で。

前田：投稿した人は、どれだけダウンロードされたかを知りたがっているので、投稿した人には件数を知らせてやるのは、次のコンテンツを引き出すために大切なのでぜひやってもらいたい。さらにいうならば、システム的に難しいのですが件数だけではなくて、どこがダウンロードしたか、アクセスしてきたドメイン名を教えてあげると喜びます。たとえば、担当していた時、全員に件数を知らせるのは無理なので、近しい人やDL上位の先生などに知らせる際に、アクセスしてきたのが東大から10件、京大何件、英語の論文ならハーバードから何件などと、世界の一流大学からのアクセスログがあればそれを知らせるとすごく喜びます。それが一番、阪大内の研究者によると嬉しいことですよ。

ダウンロードの件数やダウンロード元を知らせることはコンテンツを増やす力になります。

書いたことを知るのは大学でも難しいのです。研究主体の、たとえば阪大などであればWeb of ScienceとかScopusという世界規模のデータベースを、一週間の間にどれだけOsaka Universityの名前でコンテンツが増えたかというのを調べるんです。その中で20件とか出てきたら、だれがどこに書いているかがわかります。それが使える施設はいいけれど、教育主体の大学の場合は先生の投稿先を知ることは難しいです。どうしても力づくでやるのだったら投稿の事務作業をやっているような秘書さんに聞くなどがありますが、それはなかなか難しい問題ですね。これという決め手がありません。コンテンツとってきたら病院の医師と図書館員のつながりは終わりというわけではなく、研究者と図書館員がいつも何かで連絡を取り合っているような関係を作っている。研究支援というのでしょうかね、この関係を作った結果、放っておいてもコンテンツがやってくるという形の関係確立が、一番素直な形なんでしょうね。そうやっていると秘書さんから情報がやってきたりします。特定の雑誌を見張っておくということもできるでしょうね。

フロア：病院の場合、年報を出すので各科の業績として上げられていることが多いです。今回そのあたりからアタックしようかなと思います。

和田：奈良医大の場合、賞をとった時に大学のニュースに乗りますので、それを見て先生のところにもらいに行ったことが1回あります。その後はその先生は自発的にもってきてくださるようになりました。

前田：今後リポジトリを進めていくうえで細かいことがたくさん出てくると思います。そういうことは先行機関がほとんど経験済みのことです。乗り越えた人がいるのだからそんなに大変なことではありません。みんなで相談してやれば耐えられないことではありません。仕事をしていて、やっている仕事がどれだけ他の人、奉仕対象者の役に立っているかわからんということほど、むなしいことはないでしょう。人ですから、研究者は忙しくて怒るかもしれませんが、図書室の人ってこんなことまでやるのかと、うならせたいと思いました。最初のうちは突然押しかけていくと怪訝な顔をされるのですが、失礼極まりない代わりに、異様にモノを知っている図書館担当者になってみたいとは思いませんか？

本当の意味での専門性を持ちましょう。学ぶことは楽しく誇らしく、夜遅くまで勉強していても疲れを感じません。そういうことが本来の仕事の喜びじゃないかと私は思います。

藤原：私自身わからないことだらけですが、ちょっと楽しい気分で帰れそうな気がします。いろんな方と同じような環境を経験できて、よかったです。講師の先生方ありがとうございました。